
ミルク中毒の村人に捕まり
石化ふたなりミルクサーバーになっちゃう
仲良し姉妹の妹ちゃん
基本新CG6枚+α
本編50枚程度
イラスト:おろけが


栄養満点のミルクが自慢の小さな村、ミルクコック村。
その村で仲良く暮らしていた私、妹のミルと姉のレーチェ。
そんな平和な暮らしはいつまでも続くと思っていましたが、



ある日、レーチェお姉ちゃんが
突然姿を消してしまいました。


慌ててお姉ちゃんを探しに行った私は、
悪い魔物に変身魔法をかけられて
ふたなりダルマミルクサーバーとなった
お姉ちゃんを発見したのですが…
ウィーン
ウィーン
ウィーン
ウィーン
ウィーン


運悪く敵の魔物に見つかってしまい、
そのまま私も同じ姿にされて、あのミルクを
ひたすらに搾られる日々を送っていたのです。
ビュッビュッ
ビュルビュル


だけど、そんな私たちを助けてくれたのは
近所の村のはずれに住む魔法使いの二人組。
彼女たちに無事助け出された私たちは、変身魔法を解除してもらい、それからあの
ミルクの真実を伝えるために、二人で村に帰ることにしたん……だけど……。


あれ、お姉ちゃん??
どこ行っちゃったんだろ?
もしかして、私がトイレに行ってる間に
ほんとに一人で先に行っちゃったのかな……?
そういえばさっき、誰かが走ってる足音が
聞こえたような……


うー…ひどいよぉ…
こんな森の中に置き去りにするなんて……


でも、もう村もすぐそこだし……
はあ、一人で行くしかないかあ……

ここは私たちの村へと続く薄暗い山の道。

村と村をつなぐ唯一の道で頻繁に人が通るから、
安全はある程度確保されている場所だけど、

それでも面倒見のいいお姉ちゃんが
私を置いて先に行ってしまったというのには、
多少引っかかるものがありました。

だけど、ちょっとした上り坂の上に立つと、
私たちの村はもうはっきりと見えるくらい近くにあったので、
私はお姉ちゃんに早めに追いつこうと、少しだけ歩く速度を上げて、
村への道を進んでいったのです。

しかし――


……結局、村に着いちゃった
もう、ほんとに私のこと置いていくなんて、
家に着いたら絶対文句言ってやるんだから！


……でも、そんなことより…
なんだか村の様子が、おかしい…ような……？
なんで誰もいないんだろ…？
畑を耕してるおじさんも、酒場の人たちも、
ミルク売りのおばさんも…誰もいない
おや、ミルちゃんじゃないか！
今までどこに行ってたんだい？　心配したよ
あ、村長さん！


あの、村長さん。どうして村に誰もいないんですか？
そ、そうだ！　そんなことより大変なんです、
信じられないと思うんですけど、
実はあのミルクは、その…
私たちのオチンチンから出たもので…
すごい中毒性？　があって、
早く飲むのをやめないと大変なことに…
あーあー、わかったからまずは
落ち着きなさい。ほら、これを飲んで


あ、はい……
ありがとう……ございます…
コクッ…コクッ…


そ、それでえっと…あれ？
どこまで話しましたっけ……
あ、そうだ…レーチェお姉ちゃん…見て、ない、です……か？
途中でわたし、おいてかれ、ちゃって……
あれ…？　違う…そのことじゃなくて……
なんだっけ……なんだか、眠……く……

ハクション…

ふう、まったく世話のかかる子じゃの…
しかし、姉のレーチェはどこに行ったんじゃ……？

まあよい…一人だけでもなんとかなるじゃろ
始めるとするかの


え？　な、なに？　なんで……こんな格好で……
ミルク……ミルクだ…
ミルク……
ミルクをよこせ
？
村の人たち……？　どうして…
ビッ
ビッ


すまんのお、ミルよ
こんなことになって
しかしお前が悪いんじゃぞ？
本当ならミルクを作り続けるのは
姉のレーチェの役割だったんじゃからな
お前が余計なことをして生産を
滞らせるから、こんなことになったんじゃ
そんな、じゃあ……村長さんが、
お姉ちゃんや私にあんなことをさせたんですか!?


あんな……ひどいこと……
村の皆の生活を守るためじゃ
現に、ミルクがある間は誰も飢えておらんかったじゃろ
しかし、お前たちのせいでミルクの供給が切れてしまい、
大量のミルクをその身に秘めたお前たち以外の者には、
禁断症状が出始めておる。


というわけで、責任は取ってもらうぞ。ミル
ひっ…
はやく……ミルク……ミルクを……
わっ…
わわ…
イヤ、触らないで……
ガシッ
ギッ…


ダメ、ダメ…こすらないで、
そんなことしたら…
せっかく、抑えてもらってるのに……
ヤダッ!
ヤメテ!!
ヤメテ!
あっ、あぁぁ、ヤダっ…
イヤ…もう、あんなの……
シュコ
シュコ
シュコ
シュコ
シュコ


ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ


はひっ、あ、あぁ…
ミルクだ、ミルクだ!!
もっと出せ、もっと
ドロォ…
ハァ
ハァ
ハァ
やめて、もう……イヤぁぁ……
トプン…
トプッ


師匠さんの催眠療法により抑えていた
あのときの快楽が、射精とともに一気に解放され
何日も何日も熟成されていた濃厚なミルクの匂いが、
私の脳みそを刺激する。
そんなことをされたらもう、私の本能は……


その衝動に、抗えなかった……。
ぁんっレ
ぁっレ
ぁぁっレ
ハッレ
ハッレ
ハァレ
バッソッバッソ
はぁはぁ、あぁぁ、気持ちいい…
オチンチン、パンパンするの気持ちいいよー
ヘコ
ヘコ
ヘコ

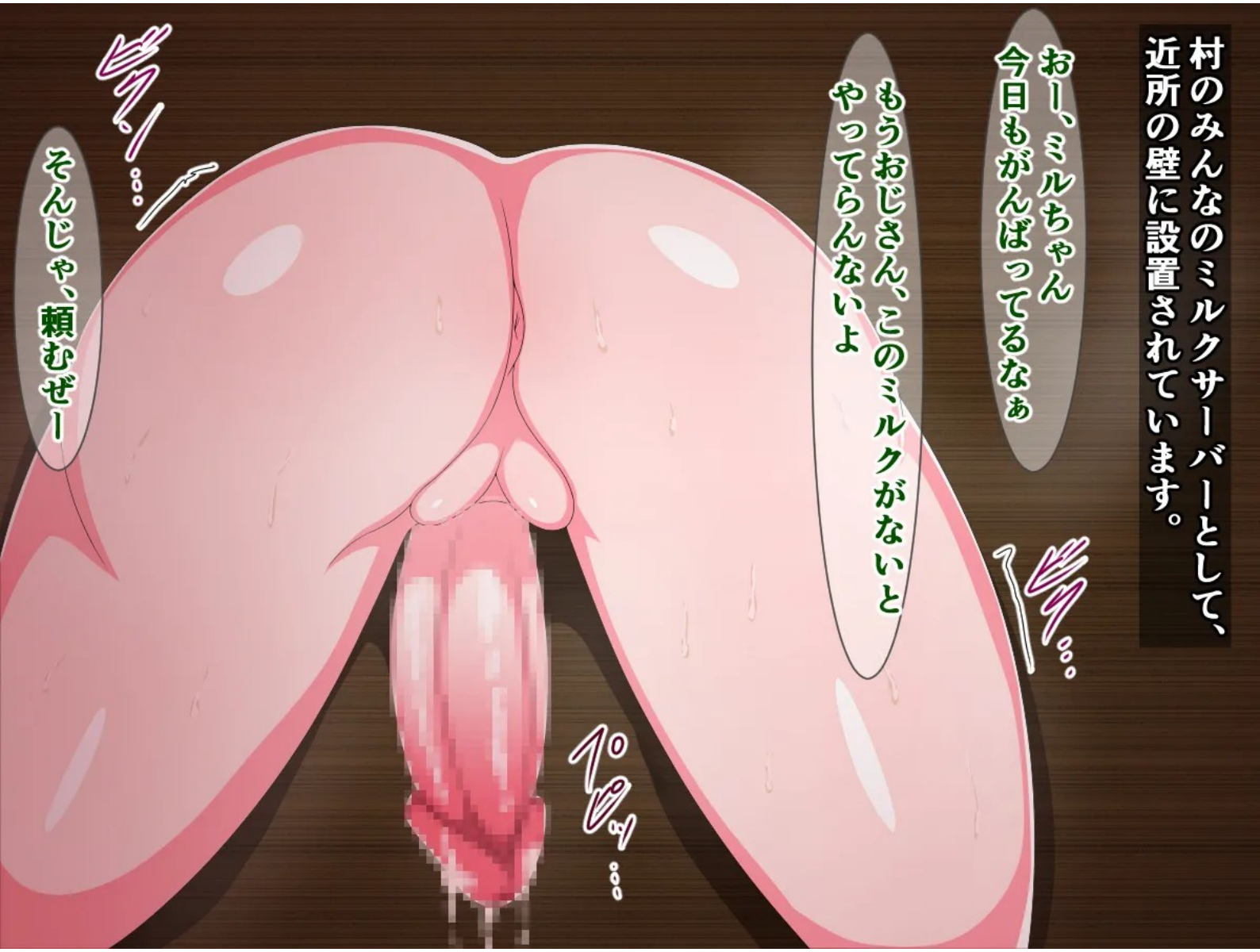

ははっ、こいつ自分から腰振ってやがる
あ～れれ
おちんぽみ～れれ
もう縛ってなくても
全然逃げる気ないな
あはっれ
おっれ
おほっれ
この搾精器に自分からチンポ突っ込んで、
一回も抜かないままミルク垂れ流してんだから
パッパッパッ
パッパッパッ


またイク、出ちゃうううううう!!
ああんっ
アレ
ああっ
ミルク……私の白色ミルク
ドピュドピュしちゃうううう❤❤❤


ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ



そうして、村のみんなに精液を提供することが仕事となった私は、現在――


村のみんなのミルクサーバーとして、近所の壁に設置されています。
おー、ミルちゃん今日もがんばってるなぁ
もうおじさん、このミルクがないとやってらんないよ
そんじゃ、頼むぜー


しっかしミルちゃんも
大変だよなあ
毎日こんなところで
ミルク用の蛇口にされてよ(笑)
ま、もう少しの辛抱だから我慢してくれよな
ハァ…
ハァ
ハァ
シコ
シコ
シコ
シコ


もう……少し……もう少しで、解放してもらえるの……？
イ…ッ
イ…ッ
イ…ッ
お、そろそろ出そうかな？
出る…っ
ビュッ
ビュッ
あっ、ああぁ…また…また出ちゃうぅぅう……
出ちゃうぅ…
ビュッ
ビュッ
もう、ムリにゃにょにいいい……
シュコ
シュコ
シュコ
シュコ
シュコ
ビュッ


ズビッ
ズビッ
ヒック
ヒック
ヒック


ハァ
ハァ
ハァ…
ビクッ…
わっ…
…はぁ、はぁ…こんなの、もう何回も無理……
いやあ、ありがとなミルちゃん。んじゃ早速飲ませてもらうか
やっと…終わったんだ……
ドプッ
ドプッ
ブピッ


おいおい、後がつかえてんだよー
さっさとしろよなー
そうだそうだ
早くしろー
次は俺だぞー
あっ……あぁ……
まだ、こんにゃ……に……

ミル…ミル、起きて

……この声は


あ、お姉ちゃん
よかったー。無事だったんだ
無事ってなんのこと？
ううん、なんでもない。変な夢でも見てたのかな？
お姉ちゃんが消えちゃって、村の人がおかしくなってて、
私は壁にくっついて毎日毎日オチンチンを搾られてね…


はあ…？　もう意味わかんないこと言わないでよ
まったく、ミルはいつまでたっても成長しないんだから
さ、バカなことやってないで
さっさと仕事に行くよ
うん！　あれ？
どうしたの？


わかんない…けど、なんでだろ？
足が動かないの、それに……手も……
あれ？　おかしいな……
なんで……
何言ってんの？　なにもおかしいことなんてないでしょ、ミル
え？


だって、それが
私たちの仕事なんだから…


え？
な、んで……これ…またあの変身魔法……？
手足が…だって、魔物は…もう…いないのに
おやおや、これは少々
ヤリすぎてしまったようじゃな、
な…んで…
ビク…
ビクン…
ミルクを搾った影響で生命力の源たる魔力が減り、
体力を温存するために余分な手足を
変身魔法で消したんじゃろう


そんな、師匠さんにせっかく解除してもらったのに……
魔物がお前たちから効率よくミルクを搾り取るために施した、防衛魔法の一種じゃ
ま、教えたのはわしの先祖じゃがの（笑）
あっ…
あっ…
う…
あっ…
なんで…


山に住む魔物にイケニエを差し出し、代わりにそのイケニエの出すミルクを提供してもらう
そうしてわしらは何百年もの間共存し、平和な時を過ごしてきた
しかし、それをお前たち姉妹が壊してしまった…
そんな…
その責任は取ってもらうぞ？　ミルよ
責任…って……


これは、魔道具……
搾精用の……ヤダ、ヤダよ…
だってこれ、ほんとに、
頭おかしく…なっちゃう……
さあミル、最後の一滴まで
わしらのために出し切っておくれ
ハッ…
グッ…
グ…
ズリュ…
ビクッ…


ズン
ズン
ズン
ズン
ズン
ズン


ひぐうううう!!!!!
嫌だ、これでイったらもう戻れなくなるうう
なのに、それなのに……イクの止められない
もうやだ、あぁぁぁぁ
イヤぁぁあ、ダメ、ヤダ、
やぁあぁぁぁああ
これ、おがじくなる、
おかひぐうぅぅう
イグっ、イグうう!!!!
イっちゃううぅっうう❤❤❤
イッ
イグッ
ズチュッ
ズリュッ




なに…これ、体が……固まって
魔力を放出しすぎた弊害じゃの
やはり、そろそろ限界じゃったか
まあよい、まだまだ陰茎に
魔力は残っておる
ビクンッ!
あっ…
あぁっ…
ビクンッ…
あぁ…
このまま固まってもらったほうが
好都合というものよ
ビクンッ…
ビクンッ…


さあ…続きを始めようかの


体が徐々に固くなり、感覚がなくなり、
それでも彼らに何度も何度も射精を強要される…
ハァ
ハァ
ハァ
ビクッ…
ハキキッ…


周りを取り巻く空気や風すらも、私が射精するのに十分な刺激となって、
オチンチンを何度も何度も震わせる……。
もう誰が触らなくても、ひっきりなしにミルクが吹き出し、
そのたびにまた体が固まって、オチンチンに感じる刺激が強くなる。
ビュッ…
ラ…
ちんぽ
ビュッ
ビュッ


それから後のことは……
もう、覚えていない……
ハァ…
ハァ…
ハァ
ハァ
あっ…
あ…

おーっす

おー、今日も畑か？

そうだよ、そろそろ種まきの準備もあるしなあ

はは、だったらしっかり飲んで仕事に備えねえとな

そういうこと（笑）


しっかし、これほんと便利だよな
わざわざミルク売りの店まで
買いに行かなくていいし
でも、これから先は
どうすんだろうな？
もうミルクを作れる魔物は
いなくなっちまったんだろ？
なあに、心配ねえさ、余計な部分を維持する
魔力は全部チンコに回ってんだ、見てろよ？


ほら、また自然に噴き出してきたぞ（笑）
うっわ、すっげえ勢い
この調子なら、俺たちの孫の代までもつだろうってよ（笑）
そりゃ、最高だな（笑）
ガタガタ
ブビュッ
ビュッ
ビュルルッ
ガタガタ


あっ…
あ…
あっ…
ガクガク…
ガクガク…




さてと、じゃあそろそろ仕事に行くとするかー
おう、またなー
ブビッ！
ブビビッ！
ブビビビッ！…
FIN





























































































